

西側の侵略：テロリズムの最も高度な形態

【訳者注】曲がったことは絶対に許せないという正義漢は多い。しかし小さな不正は追及しても、地球的規模の不正はほとんど、見えていないか、そのふりをしている。この論文を読むとそれがよくわかる。そもそも我々は、世界的レベルでは、正邪の判断も、テロリズムの定義もできない状態にある。それはすべてアメリカに任せている。極限すれば、アメリカがそういう特別な存在であることを認めることによって、我々はこの地上に住まわせてもらっている。まさにそういう意味のことを、昨年、オバマ大統領は国連演説で言ったが、(ブーチン以外) 誰もこれを咎めなかった。それより前、息子ブッシュが「君たちは我々につくか、テロリストになるかどちらかだ」と言ったときもそうだった。もっと前、父ブッシュが **New World Order** と言ったときも、誰もその意味を問い正さなかった。我々が大きく正義の感覚を狂わされている原因は、ほとんどすべてメディアにある。「要するに、テロリズムが栄えている」(p.4) すなわち、アメリカとその同盟国の国家テロに従っていれば、我々は安泰である。しかしそれは滅びの道である。

By Edward S. Herman

February 1, 2016

侵略は、大規模な殺人と破壊だけでなく、常にターゲットとなる人民とリーダーに恐怖を与えるものであるがゆえに、間違いなく、テロリズムの最も高度な形態である。2003年のアメリカのイラク侵略者たちは、襲撃の最初に、明らかに恐怖を植え付けることを狙った、“ショック・アンド・オー(威圧)” 作戦を誇らかに宣言した。それは相手方の防衛軍とともに、犠牲者である人民を、テロで抑え込むものだった。そして何百万というイラク人が、この大規模な戦略で多大の被害を受けた。ベンヤミン・ネタニアフ自身が、テロリズムを定義して「政治的目的で恐怖を吹き込むために、無辜の人々を殺し、傷つけ、脅威を与えることを意図的・組織的に行うこと」だと言った。これによってイラク戦争(2003年以降)も、一連のガザ攻撃(2008 - 2009、2012 ; 2014)も、深刻なテロとして立件できると思われる。

責任あるアメリカとイスラエルのリーダーたちは、どうやってこの罪状を逃れるのか？一つのトリックは、一般市民を殺したのは、いかなる“故意”でもなかったと主張することである。それは、本来の敵(イラク兵、ハマスなど)を追撃するときに生ずる“副次災害”(collateral damage) だという。これは真っ赤なウソで、イラクの戦争でもガザの戦争で

も、純粋な軍事目的としては理解できない、大規模な市民殺しの圧倒的な証拠がある。(私はその多くの事例を次の論文であげている——「彼らは記者を殺しているか? 確かに、市民の大量虐殺を可能にする情報コントロール組織の一部として」(*Z Magazine*, December 2004)。これがずっと前まで遡ることは、Nick Turse の『動くものは何でも殺せ: アメリカのベトナム戦争の実態』(*Metropolitan*, 2014) に詳しく記録されている。)

しかし、たとえ虐殺が副次災害だったとしても、折り込み済みの軽率および/または情報が不確かという口実を含めて、市民殺しが恒常的に避けられないということは、戦争犯罪でもあり、テロリズムでもある。ジュネーブ条約(戦時国際法)はこう規定している——戦闘に携わる者は「どんな場合にも、一般市民と戦闘要員、また市民的対象物と軍事対象物を区別し、したがって軍事対象物に対してのみ戦闘行動を向けなければならない」(Part IV, Chap. 1, Article 48) また、もし市民の死傷者が、公言された軍事目標に対する爆撃による可能性が大きければ、たとえ殺された市民が意図されたものでなくても、彼らの死(のあるもの)は予測可能であり、したがって、ある重要な意味で故意と認められる。Michael Mandel は、通常の副次災害による市民の死傷は意図的でないという主張を論駁し、テキサス州でさえ、誰か別の人物を狙って人を射殺した場合には、殺人罪になると指摘している(『アメリカはどうやって殺人罪を免れるか?』(*Pluto*, 2004, 46-56)。

アメリカやイスラエルの使う、もう一つの市民殺しに対する自己弁護は、時たま公言されるだけだが、殺された市民たちは敵の武装軍を後押ししていたのだ——彼らはテロリスト魚群が泳ぐ海のようなものだ——だから彼らは合法的な目標になる、というものだ。これは無慈悲な攻撃と、市民の大量虐殺の広大な可能性を開くことになる。特にベトナム戦争が悪名高いが、イラク、アフガニスタン、ガザにも当てはまる。市民の虐殺については、公的なソースが、目標であったことを認めることもまれにあるが、多くはなく、またこの問題は、主流メディアの注目の対象にはならない。この口実は、自国の民衆を慰めるかもしれないが、国際法や、常識的な道徳ルールを満足させるものではない。

同じことは報復防衛についても言える。アメリカとイスラエルは、常に、彼らの敵の以前の侵略行為に報復しているのだと言っている。一方、彼らの敵やそれを助ける者たちの恐ろしい行為は、たとえそれが、明らかにアメリカやイスラエルの恐ろしい行為への応戦だったとしても、決して応戦とはみなされず、許されない攻撃とみなされる。イスラエルの民族浄化計画の表向きの言い分は、イスラエルはただ報復しているだけだ、パレスチナ人が挑発し、事実上イスラエルに反撃を強制しているのだ、というものである。実は、イスラエル政府はずっと昔から、西側報道のこの偏見を利用して戦略的な折をつかまえ、パレスチナの反撃を引き出すだけの攻撃をして、イスラエルによる、より大規模な“報復”攻撃を正当化してきたのである。

もちろん、これらのトリックが功を奏するのは、メディアを含め、西側の諸機関が、西側（主としてアメリカ）の利益の要求に従っているからである。例えば、ナチスに対するニュルンベルク裁判は、侵略を「この上ない国際犯罪だが、ただ他の戦争犯罪と違う所は、それがそれ自身の内部に、蓄積された悪の全体を含んでいることだ」と言ったが、アメリカは事実上フルタイムで、侵略の罪を犯している（国連安保理の承認なく国境をこえて攻撃）ために、国連と“国際共同体”（すなわち、西側と多くの非西側リーダー、民衆でない）は、アメリカが侵略を犯しても何もしないのである。鉄面皮な 2003 年のイラク侵攻は、米の侵略に対する国連の、いかなる非難も制裁も呼び起こさなかった。そして国連は直ちに侵略 - 占領者に協力し始めた。あの大規模な攻撃と破壊について、侵略という言葉は、メディアでも学術論文でもめったに用いられないが、死傷者もなかった、2014 年 2 月の、ウクライナの、米スポンサーによるクーデタに対する防衛反応とみなされる、ロシアのクリミア占領については、絶えず用いられている。アメリカのイラク侵攻は決して防衛戦争ではなかった。そしてその当時は、結局は明らかなウソとわかったことを根拠にして、正当化された。（ウクライナ紛争における体制側のロシア悪玉化の、一つの例外については、John Mearscheimer, の「ウクライナ危機は西側の責任」（*Foreign Affairs*, Sept.-Oct. 2014）を見よ。）

過去 40 年の、おそらく最も残忍な侵略で超テロリズムである、何百万の一般市民の死を招いた事件は、1996 年に始まり、いまだに続いている、コンゴ民主主義共和国（DRC）に対するルワンダ - ウガンダの侵略である。しかしこの侵略のリーダーたち、Paul Kagame と Yoweri Museveni は、アメリカの恩を受けた配下であった（今もしかり）。そのため彼らは、いかなる国際裁判にも服さず、国連安保理や国際刑事法廷の脅しに従うこともなかった。そして、いかなるメディアも、この地方で行われたこの大規模な犯罪を記事にしていない。そのような記事を見るためには、あなたはアメリカの敵側に回らなければならない——イラン、シリア、ロシアのような。

これらのルールはまた、主要な人権団体についても当てはまる。「人権ウォッチ」も「アムネスティ・インタナショナル」も、紛争の動機には注目せず、紛争がどうなっているかについてだけ注目するという、ルールをもっている。これは、日常的に侵略を行っている国家にとっては、すばらしく好都合だが、それは論理の横面を殴るもので、また侵略は最高の国際的犯罪で、世界はそれを防ぎ、処罰しなければならないという、国連憲章の基本的思想に真っ向から挑むものである。こうして「人権ウォッチ」も「アムネスティ」も、イラクを侵略し、セルビアを爆撃したことでアメリカを非難はせず、侵略者と被侵略者双方、特に後者の戦争犯罪に注意を限定している。

「人権ウォッチ」は特に、アメリカのターゲット国の戦争犯罪を問題にするという、ひどい

偏見で悪名高い。彼らは侵略者の犯罪を軽く考え、被害者に対しては国際的行動を呼びかけている (Herman, Peterson and Szamuely, “Human Rights Watch in the Service of the War Party,” *Electric Politics*, February 26, 2007.——「戦争当事者に奉仕する人権ウォッチ」) 米英のイラク攻撃に近づいていく期間に、人権ウォッチのヘッドだった Kenneth Roth は、ウォール・ストリート・ジャーナルに、署名入り記事「サダムを起訴せよ」を書いた (March 22, 2002)。このように、迫りくる侵略戦争に反対するどころか、この人権団体のリーダーは、「この上ない国際犯罪」のために、宣伝のカバーを与えていたのである。彼の組織もまた、イラク市民の健康状態を荒廃させ、何十万という死者を出していたイラクに対する、“大量破壊制裁”を報道もせず、非難もしなかった。「ウォッチ」にとって、これらは“無価値の犠牲者ども”だった。

ルワンダの「愛国主義フロント」の、1990 - 1994 年の侵略と大量虐殺の場合には、「ウォッチ」とその友好団体 (特に Alison Des Forges) は、アメリカに支援されたウガンダのツチ族侵略軍に、ルワンダ政府が防衛的に反撃したことに焦点を当て、これを非難することに重要な役割を果たした。彼らはこれによって、ルワンダと、後にはコンゴ民主主義共和国における大虐殺に、積極的な貢献をした。(Herman and Peterson, *Enduring Lies: The Rwanda Genocide in the Propaganda System, 20 Years Later*; Real News Books, 2014, 66-70.)

同様に、過去数十年に作られた一時的な国際裁判所も、常に、侵略を除外し、戦争犯罪と“ジェノサイド”に焦点を当てるように計画されている。そして、それらはアメリカの敵対者 (セルビア、ルワンダのフツ族) に向けられている。彼らは実は侵略の犠牲者であり、そこで次には、詐欺的で正義を捻じ曲げた疑似裁判にかけられる。(ユーゴスラビア裁判については、John Laughland, *Travesty* (茶番劇) Pluto, 2007; ルワンダについては、Sebastien Chartrand and John Philpot, *Justice Belied: The Unbalanced Scale of International Criminal Justice*, Baraka Books, 2014 を見よ。) 国際刑事裁判所 (ICC) もまた、“偉大な侵略者”の要求に敬意を表して、その検討事項から「侵略」を除外するように仕組まれた。

“偉大な侵略者”は常に参加を拒否したが、それは、アメリカ市民が法廷へ突き出される理論的可能性が残っているから、という理由だった！ ICC は、リビアへの米 - NATO の侵略戦争に備えたカダフィを起訴したことによって、“偉大な侵略者”のお役に立っている。

要するに、テロリズムが栄えている。すなわち国家テロであり、それは一連のアメリカの戦争——直接、合同、代理の——ユーゴスラビア、アフガニスタン、イラク、ソマリア、リビア、シリアに対する戦争、そしてもっと広範囲な、ドローンによる暗殺攻撃である。カガメとムセヴェニによる DRC (コンゴ) における大破壊戦争において。イスラエルの、ガザとレバノンにおける戦争と、ガザと西岸の通常の和平努力において。サウジアラビアの、イエメンに対する戦争、トルコの、シリアでの代理戦争、それにクルド人との戦争において。

これらの戦争はすべて、侵略し爆撃し占領するアメリカと、その同盟軍に対する、たいていは小規模なテロ反撃を呼び起こしてきた。それらはショッキングで恐ろしいとは言っても、それを呼び起こした国家テロよりは、はるかに小規模なものだった。しかし西側のプロパガンダ組織においては、政治家や学者先生や大衆を、驚かせ、怒らせ、“テロ”と呼ばれるのは、この反撃としてのテロだけである。仕掛けた側の暴力と反応という真の流れは認められず、“テロに対する地球的戦争”とは、実は“テロという地球的戦争”だという事実の認識もない。このプロパガンダ組織は、実は、永久戦争組織の一つの構成部分で、大規模テロの頼りになるサポーターがそこから生ずる。

(エドワード・S・ハーマン (1925 生まれ) は、ペンシルベニア大学、ウォートン・ビジネス校の財政学名誉教授、メディア・アナリスト、政治経済学者。同大学のアネンバーグ・コミュニケーション校でも教えている。彼はおそらく、ノアム・チョムスキーとともに、メディア批評のプロパガンダ・モデルを開発したことで最も知られている。)